

メディア系技術者とのコラボレーションを思いながら

山口裕之

『現代メディア哲学 複製技術論からヴァーチャルリアリティへ』

講談社選書メチエ、2022

もともとベンヤミンの『技術的複製可能性の時代の芸術作品』について本を書きたいと思っていた。ベンヤミンの研究者として彼の数多くのテキストを扱うなかで、複製技術論はメディア理論を研究領域の一つとしている私にとっては、とくに重要なテキストの一つだったからでもある。ともかく、それなりに入れ込んでいたベンヤミンの複製技術論だったので、よく知られてはいるがなかなか理解し難いところもあるこのテキストについて語りたいたいという誘惑にとりつかれていたということだろう。

しかし、出版社と本のコンセプトについて相談した結果、ベンヤミンの思考そのものを解き明かすことに終始するのではなく、むしろそれによって現代のわれわれのメディア状況をとらえなおすような本にしてはどうかということになった。ほんとうにもっともなことである。関連した領域として私が取り組んでいたメディア理論の研究は、現代のメディア状況の思想史的な分析を志向している。それに最初に自分が出版したベンヤミンの研究書でも、現代のメディア状況を見据えたものになっていた。そういう意味で、編集者の提案は自分にとってもごく自然なものであったはずなのだが、それでも実際にそのように書こうとしたとき、かなり苦勞することになった。

『現代メディア哲学』という壮大なタイトル（これも編集者の提案による）を掲げるにはまだまだやらなければならない課題があまりにも多い。それでも、例えば最初の二つの章「メディアの哲学のために」と「技術性と魔術性」は、自分にとっては、重要なアイデアを提示する場になったのではないかと思う。一つ目は、「感性」と「知性」という異なる領域でそれぞれ扱われてきた「模倣的メディア」による表象と「記号的メディア」による表象の複合的な展開として、これまでの理解されていたようなメディアの展開の図式を整理し直すということ。もう一つは、技術性がたかまるにつれて、非合理的なものが払拭されていくというような単線的な世俗化の思考ではなく、同時に別の次元で魔術的なものがたかまるという逆説的な状況を見てと



ることである。メディア技術に実際の中でかかわる人にとっては、眉唾のように思える話かもしれない。しかし、まさにメディアや AI などの研究領域においてこそ、技術開発者と思想系の研究者の発想・アイデアの共有が必要であると強く感じている。そのためにはおそらく、もはやあらためてベンヤミンをもちだすことのない語り方をとることになるかもしれない。それでも、このような発想はベンヤミンを経由したからこそ生み出されたものだということをあらためて意識している。

(山口裕之)